

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿⁺源氏解読

連載第 65 回 第 12.3 節～第 12.4 節

2020 年 9 月 1 日

小 田 勝

「12.3 目的格・格助詞「を」」の 374 頁から。用例(30)～(35)の類例、

- ・かの母君のあはれに言ひおきしことの忘れざりしかば(源・藤袴)
- ・人はいさ我は昔の忘れねばものへ(=地方へ下ル)と聞きてあはれとぞ思ふ(貫之集)
- ・守、「さは、^{くわんもつ}官物出ださじとや。いかに。今日その切りてむ」と言へば(今昔 28-31)

用例(36)～(38)の類例をあげる。

- ・[私ノ]身の命長さをを罪なれば、人の(=成尋ノ)御咎とも覚え侍らず。(成尋阿闍梨母集)
- ・あさましくすまぬをすむといぶせがはそこには影を見えぬものから(千頼集)
- ・あはれてふことに飽かねば世の中を涙に浮かぶ我が身なりけり(貫之集)
- ・[三条天皇ハ]御目を御覧ぜざりしこそ、いとみじかりしか。(大鏡)

375 頁用例(48)について。次例も「…で(顔を)ふたぐ／紛らわす」の意かと思われる。

- ・声などする折は袖をふたぎてつゆ見おこせず(枕 78)
- ・…とて涙ぐまるるが、さすがに恥づかしければ、扇を紛らはしておはする心の中も(源・宿木)

同頁用例(49)(50)の類例をあげる。

- ・涼しさはやがて心にまかせたる扇をあふぐ風ならずして(頼基集)

同頁「12.4 格助詞「に」」。「③帰着点」について、次例の「に」は、方向を表している。

- ・島宮のみかりの池の浜千鳥人目嫌ひて人に(=人ノ方ニ)泳がず(人麻呂集・正保四年版本)
- ・初霧も立ち初めにけり誰に(=誰ノ方ニ向カッテ)かは人渡るらむ ^{かささぎ}鶺鴒の橋(元輔集)

「④動作の向けられる対象」では、次のような例が注意される。

- ・千代までと君にかぞへて見る月を山の端かけて入れずもあらなむ(頼政集)

376 頁、「⑤目的」の「に」は、動詞の連用形を受ける点で特殊である。

- ・この者ども、釣りしに出づれども(今昔 26-9)

「に」の上の動詞連用形は目的語をとることができる。

- ・町に魚を買ひに遣りつ。(今昔 12-35)
- ・女の、鏡を売りに定基朝臣が家に来たりければ(今昔 24-48)
- ・掃部頭藤原貞敏といへる人を遣唐使として、琵琶を習ひに遣はす。(文机談)
- ・安芸判官平基盛、百騎ばかりの勢にて、宇治路を固めにうち向かひけるに(保元)
- ・山清水ゆ汲みに行かめど道の知らなく(万 158)

次例は使役の助動詞の連用形を受けた例である。

- ・まことかと聞かせに男ども遣はして(落窪)
- ・ある人の許に謎々物語をあまた作りて解かせに遣はしたりけるを(散木奇歌集・詞書)

「に」の前の動詞が敬語形をとることもある。

- ・先つころ、[播磨ニ]まかり下りて侍りしついでに、[入道ノ]ありさま見給へに(=見サセテイタダキニ)寄りて侍りしかば(源・若紫)良清→源氏

現代語の「買い物に行く」と同様、名詞を受けることもある。

- ・防人に行くは誰が背(万 4425)
- ・ただもののゆかしければ、物見にしありきければ(宇治 13-11)
- ・花見にまかれりけるに(徒然 137)

次のような目的の「に」は、現代語では用いられない。

- ・この頃の御やつれにまうけ給へる狩の御装束着換へなどして出で給ふ。(源・夕顔)
- ・上代の御ことなれば、後代の聞きに(=後世ノ風聞記録ノタメニ)記し入れ奉るところなり。(文机談)

細かいことだが、同頁用例(3)は第3刷まで「花見にと群れつつ」とあったのを、第4刷で「花見にと群れつつ」のように下線を伸ばした。用例(5)の類例をあげる。

- ・帰るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉拾ひて行かな(万 3614)
- 「⑥変化の結果」の「に」の類例をあげる。
- ・とぶさ立て足柄山に舟木伐り木に伐り行きつ((立派ナ舟木ニナルノニ)タダノ木トシテ伐ッテ行ッタ)あたら舟木を(万 391)〈女性が他人ノ許ニ行ッタコトノ喩〉
- ・唐の太宗文皇帝は、鬚を切つて薬に焼き、功臣に賜ふ。(平治・金刀比羅本)

[出典追加] 頼基集①大中臣頼基(?-958?) ③『合本三十六人集』

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（10）

（増註版 19 頁、
新全集 28 頁）

どうするのが良いふるまいだろうかとも、相談できそうな人さえいないので、こっそり参内してくださらないだろうか。若宮がたいそう気がかりな様子で^①、涙で湿っぽい人たちの中で（そして、露の置いた蓬生の宿で^②）暮らしていらっしゃるのも、いたわしいと思わずにはいられないので、早く（若宮と一緒に）参内なさい』などと、はっきりと最後までおっしゃりきれず、涙にむせかえりむせかえりなさっては、また一方では宮中の人も（こんな自分を）気弱だとお見申し上げていることだろうと、気兼ねなさらなくてもない御様子が気の毒なので、（お言葉を）最後までお聞き申し上げないような有様で、下がって参りました」と言って、お手紙を差し上げる。（母君は）「（暗れ^く惑^{まど}う心の闇で）目も見えませんが、このような畏れ多いお言葉を（闇を照らす）光といたしまして……」と言って、御覧になる。「時がたてば少しは気の紛れることもあるだろうかと、心待ちに過ごす月日がたつにつれて、たいそう悲しみに堪えがたいのは困ったことで……。幼い若宮のこともどうしているかとずっと案じながら、あなたと一緒に守り育てるのではないことが気がかりだから、今はやはり、（ご自分を）亡き更衣の形見と見なして^③参内なさい^④」などと、心をこめて書いていらっしゃる。

（注）①原文「おぼつかなく」は中止法ではなく、「過ぐし給ふも」に係る状態修飾語。 ②原文「露けき中に」。涙の露と蓬生の露とを掛ける。 ③亡き更衣の身代わりだと思って私の許に来てくれ、の意。もちろん若君を参内させるための措辞で、本心ではない。 ④「ものし給へ＝参り給へ」